2023 年 10 月 26 日

各クラブ代表者様

事務局様

サッカーファミリー皆様

一般社団法人　神戸市サッカー協会

会長　益子　和久

４種委員長　御手洗　修

暴力暴言の根絶に向けて、私たちが必ず知っておくこと

　秋冷の心地よい季節、貴クラブますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。

又、いつも神戸市サッカー協会４種委員会の行事にご理解ご協力を頂き誠に有難うございます。

少年少女(小学生年代)のサッカーの普及発展をはかるとともに少年少女の健全な育成、仲間づくりに寄与する目的を進めるにあたり、改めて暴力暴言の根絶に向けて、私たちが必ず知っておくことを JFA のホームページより抜粋し、以下に記しました。

既にご承知のことかと存じますが、今一度、貴クラブ内において、読み合わせ又は回覧いただけますと有難いです。

何卒よろしくお願いいたします。

なぜ暴力・暴言・ハラスメントを用いてしまうのか？

暴力・暴言・ハラスメントによらないサッカー界のために。

暴力・暴言・ハラスメントを用いてしまう背景にはどのようなことがあるのでしょうか。そして、どうしたらそのような行為を防ぐことができるのでしょうか。

指導者の知識・指導力不足

暴力・暴言等に関して、最もよくあるケースは指導者から選手に対するものです。

指導が思うようにいかない、指導力の不足、苛立ちや感情の爆発で思わず、といったケースもあるでしょう。暴力・暴言等を用いることを間違いだとは考えておらず、選手のために必要なことだと信じている指導者も存在します。

指導者と選手、特に選手が子どもの場合は、相対的な上下関係が生まれます。試合に出場するメンバーを選択する、される立場であることもあり、場合によっては進路等将来に関わる影響力を持つことになり、それも上下関係につながります。

指導者の知識不足、指導力不足、倫理観の欠如。これに関しては個々の指導者が勉強するしかありません。

倫理観、競技に関する正しい知識、発育・発達に関する知識を含めて科学的根拠に基づいた効果的で適切な指導によって、選手やチームは成長していきます。

自らの経験に基づく指導

自らが子どもの時に暴力・暴言等を受けてきた経験を有していて、「スポーツ指導における暴力・暴言は必要悪である」「それが自分の競技結果に好影響を与えた」「その経験が自分を成長させた」という思いを、潜在的に持っている人もいます。
自らが経験してきたやり方を肯定してしまい、その考えに基づいて選手に対して同じような指導を繰り返してしまう。それ以外のより良い指導方法を知らず、科学的根拠に基づかない精神論・根性論でしかない指導がさらなる負の連鎖を生むことになります。

環境

指導現場はときにクローズになりがちです。
サッカーの現場は比較的オープンであり、多くの人の目があることが多いです。それでも、指導現場とはクローズになりがちであるということを、理解しておく必要があります。

指導者のエモーション

指導者に最も大事な要素である情熱。情熱を持って日々熱心に指導する中で、心ならずもエスカレートして行き過ぎてしまうこともあり得ます。
こういったケースは防げるはずであり、なんとしても防ぎたいものです。
だからこそ、お互いのために、気づきを伝える仲間、文化が必要です。様々な立場の人がかかわる中で、お互いの期待、思いの食い違いが、トラブルの種となりえます。クラブ、チームで大切にすること、お互いの期待、規範、約束事は、言葉にして予め確認しておきましょう。

サッカーに関わる全ての人が「当事者」

指導者と選手の間以外にも、他のスタッフ等様々な関係者、審判、選手同士、様々なケースが起こり得ます。
グラスルーツでもエリートレベルでも、子どもでも大人でも、ありえます。海外ではメディカルスタッフによるセクシャルハラスメントが大きな話題となりました。どの立場の誰にとってもまったく無縁ということはありません。
競技の中で、あるいは指導やケアをする中で、体の接触があることもスポーツ現場の特徴の一つです。

鍵は「傍観者」

保護者やサポーターからの心無い声も、サッカーの楽しみを奪う大きな問題です。
子どもに対する過度な干渉、審判に対する暴言、相手に対する敬意を欠く言動は、競技の安心・安全を損なう

ものです。自分のチームで何か問題があったときに、声のあげにくさ、相談のしにくさがあります。自分の立場が不利益になること、報復へのおそれ、連帯責任へのおそれ、特にチーム競技であることの集団主義の影響が出ることがあります。あるいは耐えなくてはならないと考えてしまいがちなこともあります。厳しく自分を律して競技をすることと、暴力・暴言・ハラスメントはまったく異なることです。

鍵となるのが傍観者です。
その物事に関係のない立場（当事者ではないという立場）や態度で見ている人、その場に居合わせている人です。行動が起こせない、見て見ぬふりをしてしまうこと。これは許容・受容にあたります。

なぜ暴力・暴言・ハラスメントはダメなのか？

暴力・暴言・ハラスメントはスポーツにおいて「やむを得ない」と思っていますか。
なぜ暴力・暴言・ハラスメントを用いることはいけないことなのか。
明確な根拠を持ってそれを説明することはできますでしょうか。

サッカーの本質に反する

サッカーの指導において暴力・暴言等を用いてしまうことは、力、恐怖、苦痛で相手を支配しようとすることです。それが常態化してしまうと、そういった刺激に対してプレーしてしまうようになる、そういった刺激でしかプレーできなくなると言われています。萎縮して、あるいは強制されて、自分自身の力が発揮できない、チャレンジができない。
これはサッカーの楽しさと本質的に反することです。

子どもに与える悪影響

暴力・暴言等を受けた体験がトラウマとなり、深刻なケースでは、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に陥ってしまう場合もあります。そして最悪の場合には、致命的な結果を招くことがあることは、ご存知のとおりです。スポーツ界でこのようなことは二度と起こしたくありません。
また、暴力・暴言等が子どもの発育・発達に悪影響を与えることは科学的にも明らかになっています。その中には子どもの脳の成長や発達に深刻な影響を及ぼすという研究もあります。

その研究によると、 子ども時代に厳しい体罰を受けた脳は、感情や理性をコントロールする「前頭前野」の容積が、平均して 19.1%少なく、萎縮していました。子ども時代に暴言を受けた脳は、コミュニケーションを取るときに重要な役割を果たす「聴覚野」が変形し、容積が平均して 14.1%増加していました。

保護者や指導者にとっては「愛のムチ」のつもりであっても、子どもにとってはとても怖いことであり、目に見えない大きなダメージを与えているかもしれません。

負の連鎖

「自分は暴力・暴言を受けて育ってきた」「そういう辛い経験があったからこそ成長できた」と考える人がいて、その考えに基づいて指導をしてしまい、それが子どもに連鎖してしまうとも言われます。

大人がやっていることだから、自分も周りの人に同じように振る舞っても良いんだ、と子どもが誤解してしまうことにもなり得ます。暴力・暴言等を受けながらも、それに耐えて競技を続けてきた人もいる一方で、サッカーをやめてしまった人、心から楽しめなくなってしまった人がどれだけたくさんいるか分かりません。

この負の連鎖は、強い意思を持って、断ち切って行かなくてはなりません。次の世代に残すことは許されません。

サッカーを楽しむ権利がある

スポーツは本来、気晴らし、楽しみのために、自発的にするものです。
自分で判断して主体的にプレーすることが、サッカーの楽しみの一つです。サッカーは世界中で愛される魅力のあるスポーツであり、嫌いになったり、競技が続けられなくなったり、楽しみ続けられなくなるようなことがあっては残念でなりません。子どもたちの笑顔を失うことがあってはなりません。

サッカー、スポーツを楽しむことは、すべての人の権利です。そのためには安心・安全が大前提です。そのベースにはリスペクトがあるべきです。